

第4学年「てつがく」学習指導案

授業者 野萩 孝昌

2月21日（木） 2階プレイルーム 9：00～9：40

- 1 題材名 共に深める
- 2 考える価値内容 自己・他者
- 3 題材について

（1）聴き合う関係の構築とセーフティな空間づくり

子どもたちは、昨年度よりてつがく対話を重ねてきたものの、クラス替えがあり、1学期の当初は聴き合う関係が築けていなかった。サークル対話をして、各々が自分の話したい事を話すだけであったり、異なる意見には真っ向から非難する姿も見られたりして、「対話」として成り立たない場面もしばしば見受けられた。そこで、聴き合う関係を築いていくために、話し手の意見を最後まで聴くことを、他教科の授業でも徹底していった。

最後まで聴くことにより、情報がより正確にキャッチでき、逆に自分の考えとの差異が浮き彫りになっていくことのおもしろさや、話し手の考えを表面的に聞くのではなく、話し手の想いや文脈に合わせて理解をしていくことの大切さに、子どもたちは気づいていった。こうして、てつがく対話を重ねていくと、段々と子どもたちの表情が柔らかくなり、肩の力も抜けて、和やかな雰囲気がつくられていった。発話率も増え、発言の内容も友だちの考えに関連させながら、問いを紡いでいくようになっていたり、問いそのものに焦点を当て吟味したりする子どもの姿が見られるようになった。このような子どもの対話の変化は、4年生になって初回の「てつがく」の授業で考えた「てつがくするってなに？」について適宜振り返ったり、p4cの『哲学者の道具箱』を参考とした「4-2『てつがく『の道具箱』を対話に用いたりしてきたことが、子どもたちのなかにじんわりと広がってきているのだと考える。（2内容-（1）ア、（2）ア・イ）

（2）単元について ～子どもが創る 子どもと創る～

これまで、子どもたちの素朴な疑問や問いをもとに授業を進めてきた。また、本学級の子どもたちは、ある大きなテーマから関連する問いを決めていくというプロセスがある。例えば、1学期は「ふつう」という漠としたテーマから、「当たり前ってなんだろう」「見えるってなんだろう」「もし色がなかったら」「透明は色なのか」のように、対話や思考の変容に伴って、問いが更新されていった。3学期は、子どもたちは「時間」というテーマを設定し、「人はなぜ忘れるのか」という問いから対話が始まっていった。対話が続いていくと、「忘れること」と「忘れないこと」の違いはなにか、「記憶の容量は決まっているのか」など、問いが変化している。

本時でも、子どもたちの気持ちや想いに寄り添い、教師自身も探求の共同体として対話に身を委ねつつも、「真に聴く」ことを意識し、共に考え深める「てつがく」にしていきたい。（2内容-（3）ウ）

4 学習指導計画（5時間目／全9時間）

- ・「時間」というテーマから、問いを共有し、整理する。・・・2時間
- ・決定された問いについて、対話を通して考えを広げたり、深めたりする。・・・4時間
- ・これまでの授業を振り返り、自己評価を行う。・・・3時間

5 本時の学習について

（1）本時のねらい

問いについて、他者の考えと照らし合わせながら、自分の考えを深めたり広げたりできる。

（2）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1 前時をふり返る。	・「4-2『てつがく』の道具箱」は、教室内に掲示しておく。
2 これまでの対話から生まれた問いについて考える。	・サークルの形になって対話をする。 ・相互指名で発言をつなげていく。 ・教師は、必要に応じて対話のスピードを調整したり、問いを投げかけたりする。
3 本時をふり返り、さらに自分で考える。	・対話を経て、一人で考える時間を確保する。